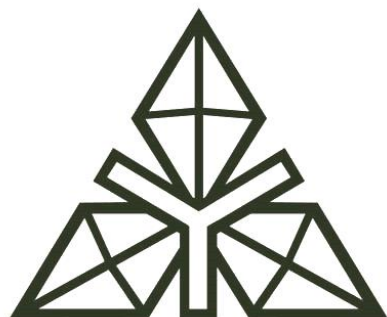


令和6年度
授 業 研 究
第 31 号



秋田県立秋田高等学校

目 次

《巻頭言》	校長
-------------	----

—本年度の研修テーマ—

生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践
～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

【令和6年度授業研修年間計画】

令和6年度秋田高校授業研修年間計画 概要	企画研修部	1
----------------------------	-------------	---

【令和6年度授業改善重点課題】

令和6年度秋田高校授業研究テーマについて	企画研修部	2
----------------------------	-------------	---

【校内授業研究（前期）】

前期校内授業研究会実施要項	企画研修部	3
---------------------	-------------	---

各教科指導案		5
--------------	--	---

【校内授業研究（後期）】

実施要項	企画研修部	19
------------	-------------	----

理科	金野 寛之	26
----------	-------------	----

地理歴史科	幕澤 美穂	28
-------------	-------------	----

英語科	佐賀 薫	30
-----------	------------	----

協議会報告書		32
--------------	--	----

省略することと真似ることの勇気

校長 柘 植 敏 朗

日本には一般に地形図といわれる詳細な情報を盛り込んだ地図が存在する。戦前は陸地測量部（現国土交通省国土地理院）が地図を取り扱う部署となっており、そこで軍事上の機密情報としての位置づけで管理されていた。また、古くは伊能忠敬が当時としては最高峰の知見と技術を駆使して日本全図を完成させており、その精緻な作図は目にするたびに感動を覚えずにはいられない。地形図は昭和初期には一枚13銭で販売されており、現在にあってもその価値は同様でほぼコーヒー一杯分の価格といわれている。

地図は詰め込まれた情報量の割には安価に経済評価された商品として認識されているからなのか、いつの時代にも最先端の英知を結集して作成されていることはあまり触れられない。さらに球面上の情報を平面に書き起こすことには無理があり、正確に言えば、すべての情報を正しく網羅することは不可能なことなのだ。距離や面積、そして方角など重要な要素をすべて満たす平面の地図は存在しない。そこに工夫を凝らし、人類はこれまで使用の目的に合致した地図をこしらえてきたのである。逆に言うならば目的に沿うためにあえて一部の情報を切り捨ててきたといってもよいのだろう。

地図上に表現された道路を目的地まで歩くとしよう。街中の地図などは道路が詳細に描かれていることはもちろんなので、次の交差点で左右どちらに曲がるのか、あるいはその先何 m 歩けばよいのか、といったことは地図を見ることで把握できる。同様に山中の登山道にあっても等高線の表現（間隔の混み具合や尾根と谷の方向など）から歩くべき方向は読み取れる。しかし、数 m で繰り返し曲がりがあったり数 m のアップダウンなどは、登山道の記載に用いられる点線で表現することは困難なことが度々だ。そのことを慮って情報を読み取ることも登山では要求されるのだ。実物である地表の情報を紙面に縮小して描くということは、作成者が情報を取捨選択することが必然となり、誤解を恐れずに言い換えるならばデフォルメすることなのである。そのため、あえてバツサリと捨てることの気持ちを作成する側に尋ねてみたいと思うことが私には時々ある。

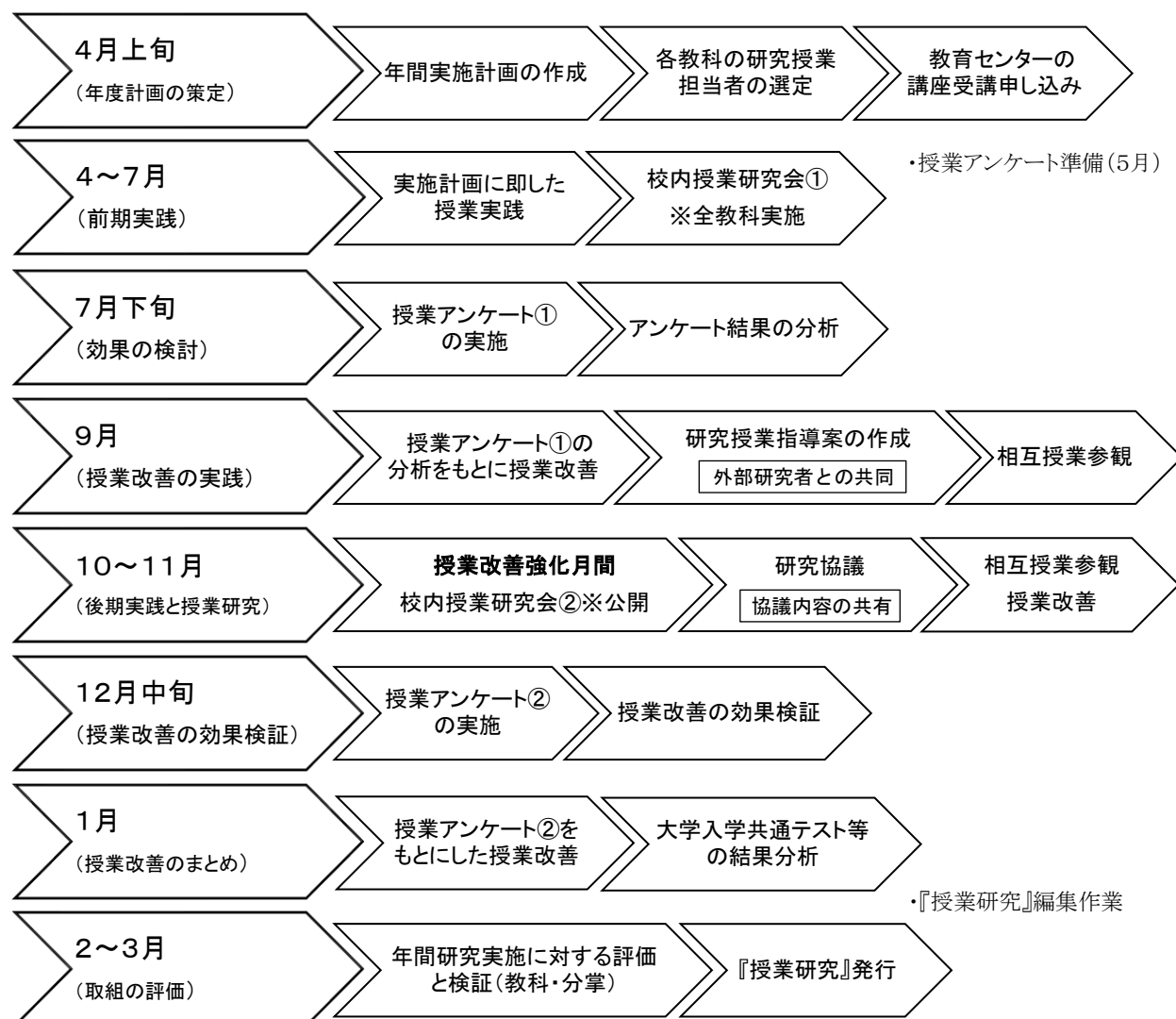
授業において授業者が時間内で扱う内容は、そこに至る過程で生徒と教師間でやりとりされた膨大な時間の中で成立した共有知の上に存在しているので、一時間や二時間の授業を見ただけではわからない双方の気持ちのやりとりが底流に存在する。これまでの積み重ねから授業内で取り扱う項目の取捨選択がなされていることも当然ありうる。授業の進め方を参考にさせていただきつつ、そうした背景を理解しないまま良い手本だとして真似てしまうことの危険性は理解しておかなくてはならない。

加えて、なんでも教えてしまうことの危うさについても留意したい。取り上げたことで安心してしまう教える側の勝手な思い込みや、生徒が自ら考える機会を奪ってしまう危険性についてである。不安を持ちつつも教える項目を絞っていく勇気、言い換えればデフォルメする勇気を持ちたいと思う。それは生徒の持つ力を信じることでもある。授業を参観する際に忘れてはならないことであり、授業改善にあっては、このようなことを知りつつ真似ることにチャレンジしたいと考えるのだ。

こうしたことは授業に限ったことではなく、日常の様々な場面でも同様だと思う。優れた実践を参考にすることは大事なことはあるが、それが自分の置かれた環境の中でもしっくり当てはまるかどうかはわからない。それは自分の目にしたことが優れた実践の一部を切り取ったに過ぎないことが多いからである。参考にしたい良さを自分の実践に取り込む際は、自分を取り巻く環境を把握しながら置き換えていく第三者的な視点を忘れないことと、自分のやり方にフィットさせていく柔軟性が大切なのだと思う。

すべて自分自身に対する警鐘の意味を込めて、心構えとして述べさせていただいた。

秋田高校授業研修（授業改善）年間計画 概要



「品性の陶冶～わが生わが世の天職いかに」－ 秋高キャリア教育テーマ 「秋高授業実践五項目」

- [1] 知的好奇心の向上 さらに深く学びたいという意欲につながる知的刺激に満ちた授業
- [2] 人間力の錬磨 専門プラスαのある授業、人間や社会について考えさせる授業
- [3] 思考力の養成 生徒が自ら「なぜ？」と考え、自ら問題を解く力を鍛える授業
- [4] 受験力の強化 入試問題の研究や指導法の工夫で、生徒に受験力をつける授業
- [5] 表現力の向上 思いや考えを自らの言葉で表現し他者に伝える力を伸ばす授業

秋田高校校内授業研究テーマ

生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

今年度の授業改善

重点課題

- ① 生徒の主体的な探究心を引き出すような、知的好奇心を刺激する授業
 - ・ 授業における仕掛けにより、さらに深く学びたいと思わせる。
 - ・ 生徒の興味や関心を高め持続させる、効果的な発問を設定する。
- ② Outputを意識した活動的な場面を設定し、生徒の気づきや深い学びを促す授業
 - ・ I C Tの効果的活用、授業形態の工夫などにより、活動的な場面を作る。
 - ・ Outputを通じて他者と協働し、生徒の気づきや深い学びにつなげる。

「秋高授業実践五項目」

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| 1. 知的好奇心の向上 | さらに深く学びたいという意欲につながる知的刺激に満ちた授業 |
| 2. 人間力の錬磨 | 専門プラスαのある授業、人生や社会について考えさせる授業 |
| 3. 思考力の養成 | 生徒が自ら「なぜ？」と考え、自ら問題を解く力を鍛える授業 |
| 4. 受験力の強化 | 入試問題の研究や指導法の工夫で、生徒に受験力をつける授業 |
| 5. 表現力の向上 | 思いや考えを自らの言葉で表現し他者に伝える力を伸ばす授業 |

令和6年度 前期校内研究授業 実施要項

企画研修部

1 目的

- (1) 教科を越えた授業参観の実施を通して、生徒の学力向上に向けた効果的な授業について多様な意見を集約し、各教科で授業改善に活用する。
- (2) 教育実習期間に実施することで、教育実習生に本校の授業のあり方を示し、実習期間中の授業計画の参考にするとともに、教職員を目指し資質向上させていくための基礎とする。

2 標準実施日

令和6年5月14日（火）

＊教科の実情に照らし、標準実施日の週内に各教科の実施日を設定する

3 実施授業一覧（前期）

教科	科目	授業者	年組	実施日	曜日	校時	教室	上段:授業内容
								下段:到達目標
国語	論理国語	佐々木繁樹	3A	5/14	火	5	3A	評論「身体の個別性」
								論理の展開を的確に捉える。
地歴 公民	世界史 探究	田口 琢央	2C	5/14	水	1	2C	ローマによる地中海世界の統一
								共和政の成立と西地中海の統一を理解する。
数学	数学Ⅱ	松 橋 弘 光	2E	5/14	火	3	2E	微分法:導関数の応用
								3次関数が常に単調に増加するための条件を求める。
理科	生物基礎	檜 尾 尚 樹	1C	5/14	火	7	生物実験室	マイクロメーターの使い方
								マイクロメーターの使い方を理解し、実際に細胞の大きさを測定する。
保健 体育	武道 剣道	目 黒 大 祐	1AB	5/13	月	2	剣道場	剣道の礼法・所作
								日本刀の特性を理解し、剣道の礼法・所作を行うことができる。
芸術 家庭	美術Ⅰ	高 久 恵 美	1E	5/14	火	7	美術室	鉛筆で描く
								対象の造形的な特徴を捉えることを理解し、鉛筆の特性を活用して表現することができる。
英語	英語コミュニケーションⅠ	三 浦 直 彦	1A	5/15	水	4	1A	Lesson 1 Friendships in the Internet Age
								デジタル機器の使い方について意見交換をし、考えを深めることができる。

4 その他

- ・授業を担当する先生は、事前に指導案・授業資料等を次のフォルダへ提出ください。

掲示板＞企画研修部より＞令和6年度＞R6授業研究会＞R6前期授業研究（5月）＞指導案はこちら

なお、授業参観時には教室にも印刷してご用意ください。

- ・実施時間に授業のない先生は、研究授業を1教科以上参観してください。事前に参観希望を調査します
- ・「参観シート」を校務センター変更黒板前に用意しますので、授業参観の記録にお使いください。
- ・参観後は、参観シートをもとに速やかにフォームに入力してください。
- ・入力結果は共有します。教科打ち合わせでの協議や授業改善にお役立てください。

※昨年の例

教科	科目	授業者	年組	実施日	曜日	校時	教室	上段:授業内容
								下段:到達目標
国語	言語文化	牧 留美子	1D	5/16	火	5	1D	「検非違使忠明のこと」(古文)
								古文の特徴を確認しつつ、動詞の活用について理解する。
地歴 公民	日本史 探究	伊藤健一	2C	5/16	火	3	2C	律令国家への道
								律令国家成立までの政治過程を理解する。
数学	数学Ⅱ	江 畑 美 保	2E	5/16	火	7	2E	三角関数
								角の範囲に気をつけて三角方程式が解ける。
理科	理数 物理	西 村 航 平	3G	5/18	木	4	3G	コンデンサーのつなぎかえ
								「電気量保存と電位の関係式」と「エネルギー的観点」の双方の考え方をを用いて電荷分布を求めることができる。
保健 体育	武道 柔道	山 田 公 一	1GH	5/15	月	3	柔道場	前回り受身・大腰
								正しい回転で前回り受身ができる。 投げられる力に逆らわずに受身ができる。
芸術	音楽Ⅰ	池 田 孝 幸	1A	5/16	火	7	音楽室	リコーダーアンサンブル
								「グリーンスリーブス」を正しい運指で演奏し、他者と合わせることができる。
英語	英コミュ Ⅰ	金 敬 子	1H	5/17	水	5	1H	CHAPTER 2 The Power of Design
								デザインがもつ「力」について、自分の経験などを元に、考えを伝え合うことができる。

国語科（論理国語）学習指導案

日 時 : 令和6年5月14日（火）4校時
場 所 : 3年A組教室
対 象 : 3年A組 42名
授 業 者 : 教諭 佐々木 繁 樹
教 科 書 : 『高等学校 論理国語』第一学習社

1 単元（題材）名

評論（八）「身体の個別性」

2 単元（題材）の目標

- (1) 文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めることができる。…（知識及び技能）(1)ウ
- (2) 立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫することができる。…（思考力、判断力、表現力等）Aウ
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。…（学びに向かう力、人間性等）

※ 本単元における言語活動 特定の資料について、様々な観点から概要などをまとめる。

（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕A(2)ア）

3 単元（題材）と生徒

(1) 単元（題材）

人は身体を持つ以上、本源的に自己中心性から完全に脱却できるものでなく、そのことに自覚的であるべきだと論じている評論文である。社会的事象と結びつけて具体例を出しており、内容の理解はしやすい。

(2) 生徒観

文系クラスであり、国語の学習に対して前向きに取り組む姿勢が見られる。ペアワークも非常にスムーズに行っている。文章の理解度や文章を書く技術には、個人差がやや見られる。

(3) 指導観

3年生に入って、取り扱う文章の難易度が急上昇してきている。文章の組立てや論理の展開に着目させることで、文章を書く・読む力を確実に向上させていくことが必要である。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

- ・「記述のルール」について自ら考えながら、与えられた条件に沿って文章をまとめる。

5 単元（題材）の指導計画

評論（八）「身体の個別性」（総時数4時間）

- (1) 様々な観点から概要などをまとめる … 4時間（本時3／4）

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めている。	立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫している。	概要などをまとめるを通して、文の効果的な組立て方について理解を深め、効果的な構成を工夫して文章を表現する方法を粘り強く考える中で、自らの学習を調整しようとしている。

7 本時の計画（本時 3／4時間）

（1）本時の目標

- ・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めることができる。（知識及び技能）(1)ウ
- ・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

（2）展開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	・これまでの学習内容を確認する。	一斉	・ノートを使わせ、前時までの内容を短時間で振り返る。		
	「自己中心的な利他主義者」とは、どういう人を言っているのだろうか。				
展開 35分	・「自己中心的」と言われる河上肇が「利他主義者」になった理由をまとめる。	個人	・ワークシートに記述させる。		
	まとめたものを、ペアで読み合い、まとめた際の考え方を説明し合う。（以下同様）	ペア	なぜそのようにまとめたのかをお互いに説明し合おう。（以下同様）	・文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解を深めている。（ア）	・ワークシート記述内容の確認
	・「思いやり」が「自己中心的利他性」と言えるのはなぜかをまとめる	個人 ペア	・まとめ方について補足説明する。（以下同様）	以下すべて同様	以下すべて同様
	・「大東亜共栄圏」という発想が怖いと筆者が言うのはなぜかをまとめる。	個人 ペア			
まとめ 5分	本時の内容を振り返る。	一斉	・本時の内容の振り返りと次時の予告をする。		

地歴・公民科（世界史探究）学習指導案

日 時 : 令和6年5月14日(火) 1校時
場 所 : 2C教室
対 象 : 2年C組 39名
授 業 者 : 教諭 田口 琢央
教 科 書 : 『世界史探究』東京書籍

1 単元（題材）名

第2章 西アジアと地中海周辺

2 単元（題材）の目標

- (1) 西アジアと地中海世界を関連付けながら、各地域の国々の成立過程を考えることができる。
- (2) 各地域の国家の成立過程について考察し、表現することができる。
- (3) 各国の相互関係と政治・文化への影響に着目しながら、国家の成立過程を理解しようとしている。

3 単元（題材）と生徒

(1) 単元（題材）

大帝国を築いたローマの特色やその成立の意義を理解したいが、共和政から内乱の一世紀を経て帝政にいたる個々の政治動向に固執することなく、それぞれの時代で大きな歴史の展開に気付かせたい。

(2) 生徒観

男子19名、女子20名、計39名のクラスである。落ち着いた授業態度であり、グループワーク、ペアワークなどには積極的に取り組み、学習に真摯に向かう姿勢や雰囲気が醸成されている。

(3) 指導観

ローマ帝国が形成される過程を理解させる単元であり、新たな地中海帝国が構築される中でどのように変容し発展したか、個々の歴史事象を有機的に関連付けることができれば、歴史認識はさらに深化され则认为る。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

- ・ローマがどのように地中海全域を支配していくのか。内外の情勢との関連性を問いながら考察する。

5 単元（題材）の指導計画

西アジアと地中海世界（総時数13時間）

- (1) 古代オリエントの統一 …2時間
- (2) 古代ギリシアと地中海世界 …5時間
- (3) ローマ帝国と地中海世界 …3時間（本時8／13）
- (4) 古代末期の社会と地中海世界の解体 …2時間
- (5) 地中海世界とアジア …1時間

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	ローマの中小自作農と政治への影響に着目して、ローマ社会の変容と政治の関係、共和政の成立過程などを理解している。	共和政から帝政にいたる政治動向に着目して、ローマの地中海帝国への過程について考察し、表現している。	ローマと周辺諸国との関係と政治への影響などに着目して、共和政の成立過程とのつながりを明らかにしようとしている。

7 本時の計画（本時 8／13時間）

（1）本時の目標

- ・共和政、身分闘争、ポエニ戦争など、それぞれの経緯や意義を理解し説明できる。（ア）（イ）
- ・共和政の完成やローマの西地中海統一への動きをとらえることができる。（イ）（ウ）

（2）展開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	・ギリシアの民主政の復習をとおしてローマの共和政の方向性を確認する。	グループ	・ローマの共和政はギリシアの民主政よりも安定した政治体制であることを確認できるように促す。	グループワークに参加し、意欲的に取り組んでいる。（イ）（ウ）	・観察 ・発言
展開 35分	・共和政の仕組みを確認し、そのねらいを考察する。	個人グループ	・共和政に関心を持たせつつ、国家形成上の政府のねらいを理解できるように助言する。	・共和政に関心を持ち、政府の政策との関連を考察している。（イ）（ウ）	・観察 ・発言 ・ノート
	共和政の内容とその目的を共有する。		共和政の構造を参考にして、政府が目指そうとした体制を推測してみよう。		
	・身分闘争について、その意義を理解する。	一斉個人グループ	・法律や官職の整備が必要であることに気付くよう助言する。	・身分闘争の結果のみならず、もたらした影響を理解できる。（ア）（ウ）	・観察 ・発言 ・ノート
	平民がとるべき対応を考察する。		貴族と平民の平等を確立させるために必要なことを考えよう。		
	・ポエニ戦争までの領土拡大の経緯、また分割統治の意義を理解する。	一斉個人グループ	・分割統治の政策およびその特色をそれぞれ関連付けながら理解することを促す。	・政策や意義について、その特色を理解している。（ア）（イ）	・観察 ・発言 ・ノート
	領土拡大の意義を、共和政体制の確立と関連づけて考える。		分割統治の背景を、考えてみよう。		
まとめ 5分	・ローマ共和政と領土拡大の経緯を再確認する。	ペア	・ローマが共和政の体制を確立し、並行して領土の拡大を実現していく過程を理解できるように助言する。	・自分で説明するという目標を達成できる。（ア）（ウ）	・観察 ・発言
	ローマの共和政が形骸化し、内乱の一世紀から帝政へと至る、過程を今日の授業と関連付けて考えさせる。				

数学科（数学Ⅱ）学習指導案

日 時 : 令和6年5月14日（火） 3校時
 場 所 : 2E教室
 対 象 : 2年E組 41名
 授 業 者 : 教諭 松橋 弘光
 教 科 書 : 『数学Ⅱ』 数研出版

1 単元（題材）名

微分法 導関数の応用

2 単元（題材）の目標

- (1) 3次関数と導関数、極値について理解できる。（知識及び技能）
- (2) 3次関数が常に単調に増加するための条件を求めることができる。（思考力、判断力、表現力等）
- (3) 互いに教え合うことを通して、3次関数と導関数、極値について、自分の中で今まで以上に深く理解しようとする意欲がある。（学びに向かう力、人間性等）

3 単元（題材）と生徒

(1) 単元（題材）

数学Ⅰでは、2次関数で絶対不等式について学んでいる。常に $f'(x) \geq 0$ となるように、定数 a の値の範囲を求められるようにしたい。

(2) 生徒観

男子24名、女子17名、計41名のクラスである。学力差はあるものの、授業に臨む態度は良好で、発展的な内容にも興味を持って取り組む生徒が多い。

(3) 指導観

お互いに協力して質問したり、説明したりしながら問題を解くことを目標としたい。また3次関数が常に単調に増加するための条件は、大学入試でも頻出分野であるため、確実に理解させたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

- ・本時の内容は生徒が理解しにくい分野である。互いに教え合うことを通して、陥りやすいミスに気づかせ、深い学びにつなげたい。また振り返りの中から自分の課題を発見させたい。

5 単元（題材）の指導計画

微分法と積分法（総時数26時間）

- (1) 微分係数と導関数 … 5時間
- (2) 導関数の応用 … 9時間（本時9／9）
- (3) 積分法 … 12時間

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	3次関数と導関数、極値について理解している。	3次関数が常に単調に増加するための条件を求めることができる。	互いに教え合うことを通して、3次関数と導関数、極値について、自分の中で今まで以上に深く理解しようとする意欲がある。

7 本時の計画（本時 9／9時間）

（1） 本時の目標

- ・ 3次関数と導関数、極値について理解できる。（ 知識及び技能 ）
- ・ 3次関数が常に単調に増加するための条件を求めることができる。（ 思考力、判断力、表現力等 ）

（2） 展開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	・プリント①の目標と課題を確認し、自分で考えてみる。	個人	・プリント①の冒頭に示している「目標とする課題」を提示する。 ・少しの時間、どのようにしたら解決できるか各自で考えさせる。		
	プリント① 関数 $f(x)=x^3+ax^2+3x$ が常に単調に増加するように定数 a の値の範囲を求めよ。				
展開 35分	・プリント②を自分で考える。その後、4人くらいのグループに分かれて問題を解く。	個人 グループ	・グループに分かれて問題を解く。お互いに質問したり、説明したりしながら協力して問題を全部解くことが目標。	・ 3次関数と導関数、極値について理解している。（イウ）	・ 観察
	プリント② 3次関数と導関数、極値について表にまとめよ。				
	・プリント③課題に取り組む。 答え合わせ	個人 グループ	・まずは一人で課題に取り組む。 解けなければ解けた人に質問するなどし、協力して取り組んでもよい。		
	プリント③ プリント②を参考に、目標とする課題の問題を解いてみよう。				
まとめ 5分	・追加問題に取り組む。	個人 グループ	・最初に提示した「目標」が達成できたか、自分がまだできないことは何か、を振り返る。	・ 3次関数が常に単調に増加するための条件について理解している。（ア）	・ プリント

理科（生物）学習指導案

日 時 : 令和6年5月14日(火) 7校時
 場 所 : 生物実験室
 対 象 : 1年C組 34名
 授 業 者 : 教諭 檜尾 尚樹
 教 科 書 : 『生物基礎』数研出版

1 単元（題材）名

第1編 生物の特徴 第1章 生物の特徴

2 単元（題材）の目標

- (1) 生物の特徴である①細胞でできている、②代謝を行う、③遺伝子としてDNAをもつ、の3点を理解しており、その知識をもとに様々な生命現象について考えることができる。（知識及び技能）
- (2) 生命活動のエネルギーはATPであることを理解し、光合成や呼吸においてどのように合成・分解されるかを自分の言葉で説明できる。（思考力、判断力、表現力等）
- (3) 実験や演習では、まず自分で考え、他者と協働して問題を解決しようとする。（学びに向かう力、人間性）

3 単元（題材）と生徒

(1) 単元（題材）

生物は多様でありながら、共通性を持っていることを理解させる。また共通する特徴の一つに「生物は細胞からできている」ことが挙げられるが、細胞の大きさやその構造について顕微鏡観察を通して理解させる。

(2) 生徒観

科学一般に関して興味・関心が高く、意欲的に授業に臨んでいる生徒が多い。授業中の説明や板書に対しても、疑問に思うことには積極的に質問し、発問に対しても知っている知識を駆使して自分の言葉で発表できる生徒もみられる。

(3) 指導観

中学の理科では満足できなかった生徒が、高校の授業で深く詳しい内容を学ぶことにより、理科に関して一層の知識欲が喚起されるように感じる。生物学では自分の体や身近な動植物を題材にして、当たり前と思われている現象にも疑問を持ち、さらに探究したいと思う好奇心を育成したい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

- ・ 普段使っている物差しは最初から目盛りがついており、1目盛りの長さは決まっている。しかし顕微鏡で長さを測定する際は、測定者が基準となる1目盛りの長さを決める必要がある。その理由を理解するとともに、教科書に載っている細胞の大きさを自分でも測定できることを経験させ、さらに探究しようとする学びにつなげたい。

5 単元（題材）の指導計画

第1章 生物の特徴（総時数9時間）

- (1) 生物の多様性と共通性 … 2時間
- (2) エネルギーと代謝 … 2時間
- (3) （実験・観察）顕微鏡の基本操作とマイクロメーターによる測定 … 2時間（本時2／2）
- (4) 呼吸と光合成 … 3時間

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	光学顕微鏡の基本的な操作を理解し、顕微鏡下で細胞を素早く正しい方法で観察している。	2種類のマイクロメーターの使用法を理解し、それらを用いて細胞の大きさを測定したり、スケッチしたりできる。	同じ班の生徒と協力しながら作業し、お互いの考えを共有しながら理解を深めようとしている。

7 本時の計画（本時 2／2時間）

（1）本時の目標

- ・光学顕微鏡の原理を理解し、マイクロメーターを用いて細胞の大きさを測定、スケッチできる・・・（知識・技能、 思考・表現）
- ・自主的に、意欲をもって測定、観察している・・・（主体的に学習に取り組む態度）

（2）展開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 10分	・前時で学んだ顕微鏡の仕組みを確認する。 顕微鏡の視野に見える細胞の数はいくつだろう。 ・ものの長さを計る法について考える。 ・接眼マイクロメーターで既製プレパラートの細胞を観察する。	一斉 個人 グループ	・要点を2つに整理し確認する。 ・実験プリントで接眼マイクロメーターの取り付け方を説明する。	・実像、虚像について理解しているか。 ・倍率と、視野の面積の関係を理解しているか。（ア） ・素早く正確に顕微鏡で観察しているか。（ア）	・発言、発表 ・観察
展開 30分	接眼マイクロメーターで細胞の大きさは測定できるか。 ・接眼マイクロメーターだけでは試料の大きさは測定できない理由を考える。 ・対物マイクロメーターを使って接眼マイクロメーター1目盛りの長さを決める。 ・1目盛りの長さを決めた接眼マイクロメーターを使って細胞を観察、スケッチする。	一斉 個人 グループ 個人	・1目盛りの長さが決まっていないことに気づかせる。 ・接眼マイクロメーターの1目盛りの長さを決める方法を説明する。（状況によっては動画を利用する） ・机間巡視しながら操作に苦勞している生徒を補助する。 操作を手早く行える生徒が班内の操作に戸惑う生徒に支援を行うよう指示する。 ・測定した結果をプリントの所定の欄に記入するよう指示する。 ・スケッチする際の注意事項を説明する。	物差しとの違いに気づくことができるか。（イ） ・実験プリントの指示された場所に数値が記入されているか。（イ）（ウ） ・適切な方法で観察、スケッチできているか。（イ）（ウ）	・発言、発表 ・観察 ・観察
まとめ 5分	実験プリントの整理と完成 ・観察結果 ・考察 ・感想	個人	・考察①の理由について、動画を用いて説明する。		

保健体育科 武道（剣道）学習指導案

日 時 : 令和6年5月13日(月) 2校時
場 所 : 剣道場
対 象 : 1年A・B組(10名)
授 業 者 : 目黒 大祐

1 単元(題材)名

(1) 基本動作

- 1 剣道の特性や成り立ち 2 礼法・所作 3 構え・足さばき・素振り

2 単元(題材)の目標

- (1) 剣道の伝統的な考え方、用具の名称や扱い方、関連した所作について理解することができる。
(2) 自己や仲間の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。
(3) 武道に主体的に取り組むとともに、相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にすることができる。

3 単元(題材)と生徒

(1) 単元(題材)

礼法・所作

(2) 生徒観

武道という日本古来の運動文化に興味を示す生徒が多く、学んだことを多方面の知識に結びつけ、考えようとする生徒が多く見受けられる。

(3) 指導観

武道は「道」の文化として、礼に始まり礼に終わるなどの伝統的な行動の仕方を、単に所作として守るだけでなく、自らの意志で大切にしようとすることを示している。そのため、相手を尊重し対戦相手に敬意を払うこと、自分で自分を律する克己の心を表すものとして礼儀を守るといった考え方があること、対戦相手を敵として考えるのではなく同じ「道」を追求する大切な仲間であるといった考え方があること、伝統的な行動の仕方を大切にすることは武道の価値を高めるとともに自己形成に役立つこと、などを理解し取り組めるよう指導していきたい。

4 単元(題材)の指導計画

(1) 基本動作(本時2/3時間)

- 1 剣道の特性や成り立ち 2 礼法・所作 3 構え・足さばき・素振り

5 単元(題材)の評価基準

	ア【知識及び技能】	イ【思考力、判断力、表現力】	ウ【主体的に学習に取り組む態度】
評価の観点	伝統的な考え方や用具の名称や扱い方、関連した所作について理解できる。	剣道での約束事や礼儀などを具体的な行動として捉え、場面に応じた所作を適宜行うことができる。	用具の扱い方や相互の安全に留意し、自己の最善を尽くすよう取り組むことができる。

6 本時の計画（本時 2／3時間）

（1）本時の目標

日本刀の特性を理解し、礼法や所作を行うことができる。

（2）展開

時間	生徒の学習活動	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 10分	・ 整列・点呼をする。 ・ 着座・座礼を行う。 ・ 竹刀の準備と安全点検を行う。 ・ 本時の目標と学習の流れを確認する。	・ 着座の際は左座右起を心掛ける。また、起踞を経由し安定した起立着座を行わせる。 ・ 竹刀の中結いが全長の4分の1のところにあるか確認させる。また、鍔止めが緩い場合は隙間のないよう装着させる。		
展開 30分	・ 日本刀、木刀、竹刀の違いについて理解する。 ・ 竹刀を用いた剣道の礼法と所作を理解する。 ・ 2人1組で礼法や所作の確認と評価を行う。	・ 日本刀には反りがあることを理解し、棟と刃部の方向について、竹刀との関連性を留意させる。 ・ 提げ刀、帯刀、抜刀、構えの意味を理解させるとともに、場面に応じた所作を適宜選択できるようにする。	・ 伝統的な考え方や用具の名称や扱い方、関連した所作について理解できているか。（ア）	・ 観察
まとめ 5分	・ 本時の学習内容を振り返る。 ・ 座礼を行う。	・ 今回学んだ内容が、毎回の授業でいかされることを理解させる。		

芸術科（美術Ⅰ）学習指導案

日 時 : 令和6年5月14日(火) 7校時
場 所 : 美術室
対 象 : 1年E組 17名
授 業 者 : 高久 恵美
教 科 書 : 『美術Ⅰ』 光村図書

1 題材名

鉛筆で描く

2 題材の目標

- (1) 対象をよく観察し、造形的な特徴をとらえながら、鉛筆の特性を活用して表現できる。（「知識及び技能」）
- (2) 対象から感じ取ったことをもとに創造的な表現の構想を練ることができる。（「思考力、判断力、表現力」）
- (3) 主体的に絵画表現と鑑賞の活動に取り組もうとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

3 題材と生徒

(1) 題材観

デッサンはよく観察して感じ取ったことを自分なりに構成して表現する力を養うことができる題材である。手は観察しやすく、自己を見つめるモチーフとして抵抗感なく取り組めると考えた。鉛筆は身近な道具であるが、様々な表現につながる可能性がある。

(2) 生徒観

男子9名、女子8名で明るく反応があるクラスである。課題に対して自分なりの考えを持って、工夫して表現しようという意欲を持っている生徒が多い。

(3) 指導観

鉛筆デッサンの表現は、モチーフをよく観察し、形・陰影・質感などの造形要素をもとに発見した情報を描き加えていくことで立体感や存在感を感じさせることができる。鉛筆や消し具の使い方を工夫することで、作品を調整しながら自分なりの表現を追究する姿勢を身につけさせたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

- ・作品制作や鑑賞活動において、お互いの視点や考え方、表現方法などについてグループ・全体で意見交換することを通して、共感や気づきから作品をよりよくしようという探究心を養う。

5 題材の指導計画

鉛筆で描く（総時数10時間）

- (1) 鉛筆デッサンの基礎 … 2時間（本時2／2）
- (2) 「手」のデッサン制作 … 6時間
- (3) 鑑賞、振り返り … 1時間

6 題材の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考力・判断力・表現力	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	・対象をよく観察し、造形的な特徴をとらえることを理解し、鉛筆の特性を活用して表現している。	・対象から感じ取ったことをもとに創造的な表現の構想を練っている。	・主体的に絵画表現と鑑賞の活動に取り組もうとしている。

7 本時の計画（本時 2／10時間）

（1）本時の目標

- 対象の観察の仕方や造形的な特徴のとらえ方を理解し、鉛筆の特性を生かして表すことができる。【知識・技能】
- 質感や陰影をとらえ、立体的に表現するための構想を練ることができる。【思考力・判断力・表現力】
- 主体的にグループ活動に取り組むことができる。【主体的に学習に取り組む態度】

（2）展開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 10分	- 前時を振り返る。 - 本時のねらいを確認する。	一斉	前時を振り返り、鉛筆の特性を生かして表現する活動に興味を持たせる。		
	対象を観察して描くときに重要な造形的な要素は何か？ （「形」「色（陰影）」「質感」など）				
展開 30分	3種の対象について観察し、造形的な要素について気付いたことをまとめ、どのように描くか考える。	個人 グループ	- グループに対象を配付し、観察させる。 - 見るだけでなく、重さや手触りなども確認させる。 - グループでの活動が協働的に進むように声を掛け、必要なアドバイスをする。	- 主体的に観察や分析の活動に取り組もうとしている（ウ） - グループでの意見交換により、考えを深めている。（イ）	- 観察（ワークシートへの書き込み） - 観察（グループ活動）
	①対象3種を観察して気付いたことをワークシートに書き出す。【個人】 ②気付いたことについて話し合う。【グループ】 ③どのように鉛筆を使って描くか予想する。【グループ】		感じ取った造形的な特徴について、鉛筆の特性（筆圧やタッチ）をどのように活用すると効果的に表現できるか？		ワークシート
	対象を観察して得た情報をもとに鉛筆で描いてみる。	個人	- 筆圧やタッチを工夫して表現しているか個別に指導する。 - 鉛筆での描画だけでなく消し具での表現方法も提示する。	対象から感じ取ったことをもとに鉛筆の特性を活用して表現している。（ア）	
まとめ 5分	本時の活動を振り返り、次時の活動について確認する。	一斉	工夫して表現している生徒について紹介し、本時の学習について再度確認させる。		

英語科（英語コミュニケーションⅠ）学習指導案

日 時 : 令和6年5月15日(水) 4校時
場 所 : 1A教室
対 象 : 1年A組 35名
授 業 者 : 教諭 三浦 直彦
教 科 書 : BLUE MARBLE English Communication I
数研出版

1 単元（題材）名

Lesson 1 Friendships in the Digital Age

2 単元（題材）の目標

- (1) 英語の語順、特にS+V+O1+O2、S+V+O+Cの文型を含む表現を理解し、活用することができる。（知識及び技能）
- (2) デジタル時代の交友関係、ソーシャルメディアの利点や弊害についての情報を整理し、事実や自分の考え、気持ちを論理的にまとめながら話したり、書いたり、伝え合ったりできる。（思考力、判断力、表現力等）
- (3) ソーシャルメディアとの向き合い方、情報の取り扱い方について、ペアワークなどをおして意見交換をし、自分の考えを更に深めようとしている。（学びに向かう力、人間性等）

3 単元（題材）と生徒

(1) 単元（題材）

デジタルネイティブ世代にとってソーシャルメディアは今や生活に欠かせないツールだが、便利であると同時に様々な危険性もはらんでいる。単元をおしてソーシャルメディアとの向き合い方について考えさせたい。

(2) 生徒観

授業に対する集中力も高く、発問などに対して積極的に応じようとする生徒も多い。知識欲も旺盛であり、英語の表現力を高めようとする姿勢も強く感じられる。4技能をバランス良く伸ばせるように支援したい。

(3) 指導観

読解力・リスニング力の強化を柱にスピーキング・ライティングの力を養い、4技能をバランス良く身につけさせたい。また、各レッスン内容を「自分ごと」としてとらえさせることで、深い理解につなげたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

- ・読んだり聞いたりした内容と学習者の体験や考えをリンクさせ、意見交換によって多様な考えを共有することで新たな発見ができる授業を行う。

5 単元（題材）の指導計画

Lesson 1 Friendships in the Digital Age（総時数7時間）

- (1) Overview … 1時間
- (2) Part 1~3 … 5時間
- (3) Interaction … 1時間（本時7／7）

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	・S+V+O1+O2、S+V+O+Cの文型を理解し、活用できる。 ・ソーシャルメディアの特徴や実情を理解し、自分の考えを伝える技能を身につけている。	・ソーシャルメディアの特徴についての確に要旨をまとめ、段落の論理構造を正確にとらえている。 ・自分の考えをまとめ、論理的に表現している。	・ソーシャルメディアについて理解したことを自分の体験と結びつけ、自分の考えを分かりやすく他者に伝え、他者の考えを積極的に理解しようとしている。

7 本時の計画（本時 7／7時間）

（1）本時の目標

- ・聞き取った内容を整理しながら伝え合い、学んだ表現を言語活動に活用できる（思考力、判断力、表現力）。
- ・ソーシャルメディアに関連する脅威からいかに身を守るかについて意見を共有し考えを深めることができる。（学びに向かう力、人間性）

（2）展開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	30-second speech ・ペアでデジタル機器の使い方を話し合う。 How do you use digital devices such as smartphones and chrome books?	ペア	・例を示し、発話させる。 ・話し合ったことをクラスで共有させる。	・自分の言葉で伝えようとしている。…（ウ）	・観察
展開 35分	Today's goal: To think about what you can do to protect yourself and your online friends from threats. 1 対話を聞いて空所を埋める。 2 対話を音読し、英語表現を学習する。 3 ペアでデジタル機器の使い方について話し合い、内容をクラスで共有する。 What can you do to protect yourself and your online friends from threats? 4 ソーシャルメディアの欠点を示す1文を確認し、対策について考える。 5 他者の発表内容を用紙にまとめる。	個 一斉 ペア ペア 一斉 個 集団 個	・正しく聞き取れているか確認し、追加の質問で理解度を測る。 ・オーバーラッピングまたはシャドーイングで音読させ、いくつかの英語表現をとりあげる。 ・ペアでの話し合いの内容を表にまとめさせ、発表させる。 ・個人で考えさせた後、グループで話し合わせる。その後、発表させる。英語での表現について支援をする。 ・記入用紙を回収し、授業後に点検し、次時にフィードバックを行う。	・会話の内容を理解している。…（ア） ・英語の特徴に沿って音読している。…（ア） ・要点を整理し、分かりやすく伝えようとしている。…（イ） ・要点を整理し、分かりやすく伝えようとしている。…（イ） ・回収物から、授業の成果と改善点を検討する。…（イ）	・観察 ・発言 ・観察 ・ワークシート ・観察 ・発言 ・ワークシート ・観察 ・発言 ・ワークシート
まとめ 5分	・本時の振り返りを行う。	個 一斉	・単元内容と本時で考えたことを結びつけ、考えを深めるための助言をする。		



令和6年度 校内授業研究会(公開)

研究テーマ 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践

～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

11月 7日(木)

- 受付 13:30～14:00 (30分)
- 授業参観 14:05～14:50 (45分)
- 協議会 15:10～16:10 (60分)

[研究授業一覧]

教科	科目	指導者	クラス	会場	内容
理科	化学	金野 寛之	2E	21教室	第2章 第4節 化学平衡
地理歴史	地理総合	幕澤 美穂	1H	1H教室	第1章人々の生活文化と多様な地理的環境 4節 生活と産業 工業立地の変化
英語	英語コミュニケーションⅡ	佐賀 薫	2G	31教室	Chapter 7 The Psychology of Everyday Experience

*授業会場へは係がご案内します。

協議会会場はすべて授業と同会場での実施となります。

○参加者名簿

	所属	職名	氏名	参観	協議会
1	柴田学園大学	学長	吉澤 結子	理科	理科 1
2	秋田県立大学	助教	尾崎 加奈	英語	英語 1
3	鹿角高校	教諭	石木田 倫子	地理歴史	授業参観のみ
4	大館鳳鳴高校	教諭	成田 康浩	地理歴史	授業参観のみ
5	能代松陽高校	常勤講師	ミハロガ アナ	英語	英語 2
6	能代松陽高校	A L T	John Jarvis	英語	英語 2
7	由利工業高校	教諭	佐々木 啓	地理歴史	地理歴史 1
8	矢島高校	臨時講師	高橋 司	地理歴史	地理歴史 2
9	大曲高校	教諭	山崎 真悟	理科	理科 2
10	横手高校	実習助手	加藤 華世	理科	授業参観のみ
11	国学館高校	教諭	田口 利彦	地理歴史	地理歴史 3
12	桜中学校	教諭	土橋 光輝	英語	英語 3
13	秋田高校	教育専門監	佐々木 繁樹	理科	理科 3
14	秋田高校	教諭	菅野 愛	理科	理科 4
15	秋田高校	臨時講師	樋泉 淳	地理歴史	地理歴史 4
16	秋田高校	教諭	牧 留美子	地理歴史	地理歴史 1
17	秋田高校	教諭	千田 玲央奈	理科	理科 5
18	秋田高校	教諭	富樫 良恵	英語	英語 4
19	秋田高校	教諭	田口 琢央	地理歴史	総括
20	秋田高校	教諭	伊藤 健一	地理歴史	地理歴史 2 司会
21	秋田高校	教諭	村越 裕悦	地理歴史	地理歴史ファシリテーター
22	秋田高校	教諭	一関 修二	地理歴史	地理歴史記録
23	秋田高校	教諭	菊地 文雄	地理歴史	地理歴史 3 司会
24	秋田高校	教諭	秋田 法俊	地理歴史	地理歴史 4 司会
25	秋田高校	教諭	菊地 達八	地理歴史	地理歴史 1 司会
26	秋田高校	教諭	齊藤 真一	地理歴史	地理歴史全体司会
27	秋田高校	教諭	武石 知也	理科	理科 1
28	秋田高校	教諭	松井 優介	理科	理科 2
29	秋田高校	教諭	松橋 弘光	理科	理科 3
30	秋田高校	教育専門監	佐藤 真弓	理科	理科 4
31	秋田高校	臨時講師	加賀 智大	理科	理科 5
32	秋田高校	教諭	斉藤 尚史	理科	理科 1
33	秋田高校	教諭	神尾 健太郎	理科	英語ファシリテーター
34	秋田高校	臨時講師	初山 聖陽	英語	英語 1
35	秋田高校	教諭	野呂 耕一郎	英語	理科 2
36	秋田高校	教諭	鳥井 拓弥	理科	理科記録
37	秋田高校	教諭	西村 航平	理科	理科 3 司会
38	秋田高校	教諭	藤井 翼	理科	理科 4 司会
39	秋田高校	教諭	樫尾 尚樹	理科	理科全体司会
40	秋田高校	教諭	遠藤 金吾	理科	理科 5 司会
41	秋田高校	教諭	奈良 紳也	理科	理科 1 司会
42	秋田高校	臨時講師	佐藤 隆一	理科	理科 2 司会
43	秋田高校	教諭	沢田石 智	理科	理科ファシリテーター
44	秋田高校	実習助手	百瀬 昇子	理科	理科 3
45	秋田高校	教諭	須田 真	英語	英語 2 司会

46	秋田高校	教諭	瀬尾 達也	英語	英語 3 司会
47	秋田高校	教諭	角崎 綾子	英語	英語 4 司会
48	秋田高校	教諭	三浦 藍子	英語	英語記録
49	秋田高校	教諭	打川 史子	英語	英語 1 司会
50	秋田高校	教諭	伊藤 愛梨	英語	英語 2
51	秋田高校	教諭	三浦 直彦	英語	英語全体司会
52	秋田高校	教諭	金 敬子	英語	英語 3
53	秋田高校	臨時講師	内海 則彦	英語	英語 3
54	秋田高校	教諭	山田 公一	理科	理科 4
55	秋田高校	教諭	目黒 大祐	地理歴史	地理歴史 2
56	秋田高校	教諭	藤原 淳	理科	理科 5
57	秋田高校	教諭	佐藤 栄幸	英語	英語 4
58	秋田高校	教諭	神居 恵悟	地理歴史	地理歴史 3
59	秋田高校	教諭	加茂 玲子	英語	理科 5
60	秋田高校	教諭	池田 孝幸	地理歴史	地理歴史 4
61	秋田高校	教諭	高久 恵美	地理歴史	地理歴史 1

グループワーク／指導・助言

●理科 化学

[指導・助言] 淀谷 誠也 氏 (大曲農業高等学校 教頭)

所属	役割	氏名	班
秋田高校	授業者	金野 寛之	
秋田高校	司会	樫尾 尚樹	
秋田高校	ファシリテーター	沢田石 智	
秋田高校	記録	鳥井 拓弥	
柴田学園大学		吉澤 結子	理 1
秋田高校		武石 知也	理 1
秋田高校		斉藤 尚史	理 1
秋田高校	1 班司会	奈良 紳也	理 1
大曲高校		山崎 真悟	理 2
秋田高校		松井 優介	理 2
秋田高校		野呂 耕一郎	理 2
秋田高校	2 班司会	佐藤 隆一	理 2

所属	役割	氏名	班
秋田高校		佐々木 繁樹	理 3
秋田高校		松橋 弘光	理 3
秋田高校	3 班司会	西村 航平	理 3
秋田高校		百瀬 昇子	理 3
秋田高校		菅野 愛	理 4
秋田高校		佐藤 真弓	理 4
秋田高校	4 班司会	藤井 翼	理 4
秋田高校		山田 公一	理 4
秋田高校		千田 玲央奈	理 5
秋田高校		加賀 智大	理 5
秋田高校	5 班司会	遠藤 金吾	理 5
秋田高校		藤原 淳	理 5
秋田高校		加茂 玲子	理 5

●地理歴史科 地理総合

[指導・助言] 佐藤 央 氏 (秋田西高等学校 教育専門監)

所属	役割	氏名	班
秋田高校	授業者	幕澤 美穂	
秋田高校	司会	齊藤 真一	
秋田高校	ファシリテーター	村越 裕悦	
秋田高校	記録	一関 修二	
由利工業高校		佐々木 啓	地 1
秋田高校		牧 留美子	地 1
秋田高校	1 班司会	菊地 達八	地 1
秋田高校		高久 恵美	地 1
矢島高校		高橋 司	地 2
秋田高校	2 班司会	伊藤 健一	地 2
秋田高校		目黒 大祐	地 2

所属	役割	氏名	班
国学館高校		田口 利彦	地 3
秋田高校	3 班司会	菊地 文雄	地 3
秋田高校		神居 恵悟	地 3
秋田高校		樋泉 淳	地 4
秋田高校	4 班司会	秋田 法俊	地 4
秋田高校		池田 孝幸	地 4

●英語科 英語コミュニケーションⅡ

[指導・助言] 高橋 輝亨 氏 (秋田県教育庁高校教育課 英語教育推進チーム指導主事)

所属	役割	氏名	班
秋田高校	授業者	佐賀 薫	
秋田高校	司会	三浦 直彦	
秋田高校	ファシリテーター	神尾 健太郎	
秋田高校	記録	三浦 藍子	
秋田県立大学		尾崎 加奈	英 1
秋田高校		靱山 聖陽	英 1
秋田高校	1 班司会	打川 史子	英 1
能代松陽高校		シムダ アナ	英 2
能代松陽高校		John Jarvis	英 2
秋田高校	2 班司会	須田 真	英 2
秋田高校		伊藤 愛梨	英 2

所属	役割	氏名	班
桜中学校		土橋 光輝	英 3
秋田高校	3 班司会	瀬尾 達也	英 3
秋田高校		金 敬子	英 3
秋田高校		内海 則彦	英 3
秋田高校		富樫 良恵	英 4
秋田高校	4 班司会	角崎 綾子	英 4
秋田高校		佐藤 栄幸	英 4

協議会の進め方

【協議会の形式】

◎ワークショップ形式で「マトリクス法」を用いて協議します（グループワーク→全体共有）

※Chromebook（FigJam）を使用します。各協議会の説明にしたがって進めてください。

マトリクスは $n \times n$ の表です。今回の協議会では 2×3 の表を用います。

【タテの項目】①深い学びにつながる発問・思考力／②ICT活用・教材工夫・活動的授業

【ヨコの項目】①よい点・取り入れたい点／②課題／③改善の具体的手立て

★マトリクス法のメリット

- ・付箋をセルに置きながら話すので効率的になる
- ・授業改善の視点がどこにあるのか可視化される

【協議時間】

15:00～16:00（60分）

【次第】

I. 開会

II. 授業者、指導・助言者の紹介

授業者から研究授業の振り返り（5分）

III. ワークショップ（45分）

① 説明（FigJamのセッティングを含む）（5分）

② 授業参観の振り返り ※個別の活動（10分）

③ グループワーク（付箋の紹介→構造化）（20分）

④ 全体共有（10分）

IV. 指導・助言 ※研究授業・協議会全般について（10分）

V. 閉会

[ワークショップの流れ]

1. 目的と方法の共有 ◎全体進行から説明があります

2. FigJam の準備 Classroom への参加 クラスコード [2kl3fma]

3. 授業参観の振り返り [10分程度] ※個別の活動

★授業者からコメントをいただきます

[深い学びに繋がる発問・授業での思考力] [ICT活用・教材の工夫・活動的な授業] に焦点をあてて、それぞれ「よい点（青色付箋）」「課題（黄色付箋）」「改善の具体的手立て（ピンク付箋）」に入力します。

★項目ごとに、付箋に入力しましょう

★付箋1枚につき、一つの内容を簡潔に入力しましょう

4. グループワーク [20分程度] ◎グループ活動は班司会がリードします

(1) 付箋の内容を紹介し合いながら、整理したり関連付けたりしましょう

★テキストボックスで見出しをつけたり、因果関係のあるものや対立するもの等を図形で結んだりして、意見・アイデアの構造化を図りましょう

→ [よい点] について共通理解を図りましょう

→ [課題] と感じたところを話し合いましょう

→ 授業者に対する[改善の手立て]を具体的に提案しましょう

5. 全体共有 [10分程度] ◎全体進行がリードします

(1) グループワークの成果発表

★各グループの成果を共有しましょう

★（時間があれば）グループ発表への質疑を行いましょう

(2) 研修成果の確認

★授業改善のポイントを整理しましょう

■協議会の振り返りについて

◎「google フォーム」で振り返りを行います（校内参観者）

[質問項目（予定）]

・ワークショップ（評価）▶ ワークショップから見た授業改善の課題（自由記述）

・授業研究会全般（評価）▶ 研究会を通しての感想、自身の考えの変容（自由記述）

・明日から、自身の実践で変えていきたいこと（自由記述）

授業参観シート

★授業参観でメモし、協議会のグループワークに役立てましょう

■ 授業参観の視点

構成と主発問	教師の説明等	板書と教材等	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
・授業目標の明確化 ・魅力ある主発問 ・学びの空間、言語活動	・発問の質や効果 ・言葉や表情	・視認性、計画性 ・プリント、副教材 ・ICTの効果的な活用	・課題の発見・解決 ・問いを発する ・興味・関心の持続	・表現し意見を共有 ・考えを深め合う協働 ・思考の言語化	・内容の掘り下げ ・単元の見方・考え方

※協議会のグループワークでは、[深い学びにつながる発問・授業での思考力] [ICT活用・教材の工夫・活動的な授業] に焦点をあて、それぞれ「よい点（青色付箋）」「課題（黄色付箋）」「改善の具体的手立て（ピンク付箋）」に分けて整理し協議します。

	よ い 点（青）	課 題（黄）	改善の手立て（ピンク）
深い学びにつながる発問・授業での思考力			
ICT活用・教材の工夫・活動的な授業			

理科（化学）学習指導案

日 時 : 令和6年11月7日（木）
場 所 : 21番教室
対 象 : 2年E組 41名
授業者 : 教諭 金野 寛之
教科書 : 『化学』第一学習社

1 単元（題材）名

第2章 第4節 化学平衡

2 単元（題材）の目標

- (1) 化学反応について、平衡状態で成り立つ関係や平衡移動の原理について理解できる。
(知識及び技能)
- (2) 観察・実験などを通して、化学平衡やその移動について原理を見出して表現することができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 化学反応が生じる際の可逆性や化学平衡に関心をもち、科学的に探究しようとする。
(学びに向かう力、人間性等)

3 単元（題材）と生徒

(1) 単元（題材）

反応を可逆的に捉えるなど、化学平衡の観点で化学反応を理解することは高校化学の学習を進める上で非常に重要であり、その後に学ぶ無機物質や有機化合物の反応の深い理解につながる。平衡の概念や原理を正しく理解させるために、観察や実験などを通して平衡に関わる現象の具体的なイメージをもたせることが大切である。

(2) 生徒観

科学的な現象への関心が高く、教師の投げかけに対して積極的に発言し、生徒間においても活発に議論し合う様子が見られる。その点を活かし、現象について多面的に考察させることで、個々の深い理解につなげていくことが求められる。

(3) 指導観

演示実験を行うなど、実際に現象を観察させることによって具体的なイメージをもたせるとともに、その現象がなぜ生じるのかを多面的かつ科学的に考察させることで深い理解につなげたい。

4 本校の研究課題との関わり

研究課題 生徒の「深い学び」を基盤とした授業実践～新たな問いや気づきを引き出す授業を目指して～

現象が生じる理由やその現象の背景にある原理・原則について、教師側で説明するのではなく生徒に見出させることで主体性を引き出す。また演示実験の結果について、グループごとに議論・予測させることで多面的に考察させ、理解の深化を図る。

5 単元（題材）の指導計画

第2章 第4節 化学平衡（計4時間）

- (1) 可逆反応と化学平衡 … 1時間
(2) 平衡定数 … 2時間
(3) 平衡移動 … 2時間（本時1／2）

6 単元（題材）の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	化学反応の可逆性や化学平衡の法則、平衡の移動について、基本的な概念や原理を理解している。	様々な可逆反応における量的関係を平衡定数の形で表すことができる。また、ルシャトリエの原理をもとに平衡の移動について考察できる。	化学反応が生じる際の可逆性や量的関係に関心をもち、その意味や平衡状態の表し方について意欲的に探究しようとしている。

7 本時の計画（本時 1 / 2 時間）

（1） 本時の目標

- ・平衡移動に関する原理を見出し、言葉で表現することができる。（思考力、判断力、表現力等）
- ・ルシャトリエの原理をもとに、実験結果について意欲的に考察している。（主体的に学習に取り組む態度）

（2） 展 開

時間	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価 の観点	評価 方法
導入 10分	・ 演示実験で NaCl が析出する様子を観察する。 ・ NaCl が析出した理由について考察する。 ・ 学習課題を確認する。	グループ	・ 演示実験として飽和食塩水に塩酸を加える。塩酸の扱いに注意する。 ・ NaCl の溶解・析出も可逆反応であることなど、ヒントを与え議論を促す。		
課題 平衡の移動は、どのような原理に基づいて生じるのか？					
展開 30分	・ 平衡の移動に関する原理（ルシャトリエの原理）を予測し、言葉で表現する。	グループ	・ いくつかの班の考えを全体で共有する。この段階で答えは示さない。	(イ) 思考力、判断力、表現力等	ワークシート
実験①：圧力を大きくすると、容器内でどのような変化が観測されるか？ 2NO_2 （赤褐色の気体） $\rightleftharpoons$ N_2O_4 （無色の気体）					
	・ 上で考えた原理をもとに実験結果を予測する。 ・ 実験を観察し、結果から再度考察する。		・ 各グループの予測を共有する。1～2つの班に予想した理由を説明させる。 ・ 実験を行い、結果について説明する。	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	ワークシート
実験②：温度を上げると、容器内でどのような変化が観測されるか？ 2NO_2 （赤褐色の気体） $\rightleftharpoons$ N_2O_4 （無色の気体） $\Delta H = -57 \text{ kJ}$					
	・ 実験①と同様、実験結果を予測する。 ・ 実験を観察し、結果から再度考察する。		・ 各グループの予測を全体で共有する。時間があれば理由を説明させる。 ・ 実験を行い、結果について説明する。		
まとめ 5分	・ 平衡移動の原理について教科書の記述を確認する。 ・ 確認問題に取り組む。 ・ 振り返りシートを記入する。	個人	・ 今日の授業では、平衡移動に対する濃度・圧力・温度の影響を実験的に確認できたことを伝える。 ・ 席をもとに戻し、個人で取り組ませる。		

地理歴史科（地理総合）学習指導案

日 時 : 令和6年11月7日（木）6校時
 場 所 : 1年H組教室
 対 象 : 1年H組 35名
 授 業 者 : 教諭 幕澤 美穂
 教 科 書 : 『地理総合』東京書籍
 『新詳 高等地図』帝国書院

1 単元名

第2編 国際理解と国際協力 第1章 人々の生活文化と多様な地理的環境 4節 生活と産業
 24 工業立地の変化

2 単元の目標

- (1) 世界の人々の特色ある生活文化を基に、人々の生活文化が地理的環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性をもつことや、地理的環境の変化によって変容することなどについて理解する。【知識・技能】
- (2) 世界の人々の生活文化について、その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、主題を設定し、多様性や変容の要因などを多面的・多角的に考察し、表現する。【思考・判断・表現】
- (3) 生活文化の多様性と国際理解について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする態度を養う。【学びに向かう力、人間性等】

3 単元と生徒

(1) 単元観

産業は、自然的条件や社会的条件の影響を受け発展してきた。人々の生活文化は、地理的環境の変化によってどのように変容するかを理解し、表現することができる。

(2) 生徒観

普通科35名が在籍する。学習意欲が高く、ペアワーク、グループワークなどにも積極的に取り組むことができる。資料の読解力、多面的・多角的で深い思考力を身に付けさせたい。

(3) 指導観

既習事項が定着している生徒が多い。多様な資料から傾向や法則性を見出し、比較することで深い学びに繋げたい。

4 単元の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考力・判断力・表現力	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	世界の人々の特色ある生活を基に、人々の生活文化が、地形、気候などの自然環境や、歴史的背景や経済発展などの社会環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性をもつことや、それらの地理的環境の変化によって変容することなどについて理解している。	世界の人々の生活文化について、その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、「地理的環境を踏まえた生活文化の理解と尊重」などの主題を基に、「多様な生活文化に配慮して、世界の人々が共存するためにはどのような工夫が必要なのだろうか」などを多面的・多角的に考察し、表現している。	生活文化の多様性と国際理解について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

5 指導と評価の計画

時	学習内容 (時数)	評価規準		
		(ア) 知識・技能	(イ) 思考力・判断力・表現力	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度

1	食生活と農業の分布 (2)	農業とその分布、さまざまな要因がからむ地球的な課題について基本的な事柄と追究の方法を理解し、その知識を身に付けている。		技術の発展やグローバル化などによる農業の発展・変容、各国の社会状況にあった具体的な解決が求められる地球的な課題について、関心と課題意識を高め、それらを意欲的に追究し、捉えようとしている。
2	工業立地の特徴 (1/2)	工業立地に関する地図や統計・画像などの諸資料から有用な情報を選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。	工業の特徴や工業立地、それらの変化について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	
3	商業立地と人々の生活 (1)	商業とその分布、さまざまな要因がからむ地球的な課題について基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。	商業の特徴や工業立地、それらの変化について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	
4	情報産業の発達と生活文化の変化 (1)		情報産業の特徴や立地、それらの変化について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	技術の発展やグローバル化などによる情報産業の発展・変容、各国の社会状況にあった具体的な解決が求められる地球的な課題について、関心と課題意識を高め、それらを意欲的に追究し、捉えようとしている。

6 本時の計画

(1) 本時の目標

資料の読み取りを通して、工業の立地について多面的・多角的に考察し、表現する力を身に付ける。(ア) (イ)

(2) 展開

	生徒の学習活動	教師の活動及び指導上の留意点・資料	主な評価の観点・評価方法
導入 10分	1 ビール工場の分布図を読み取る。	・ビール会社工場一覧を見て、作図させた後、全体で共有させる。分布の傾向を読み取らせる。 資料：ビール会社工場一覧	
	発問①：なぜビール工場は大都市の近くに分布しているのか。		
調査 5分	学習課題：工業の立地条件について、キーワードを用いて説明することができる。		
整理 5分	2 担当した資料から読み取った内容、資料からビール工場が大都市に分布する理由を考察し、学習プリントにまとめる。 Google スライドを活用してグループで共有する。	・グループ①で資料を読み取らせる。 資料A：原料の特性 資料B：ビールと他の飲料との製造地の違いが分かる資料 資料C：都市部の消費量が分かる資料 ・Google スライドを利用して効率的に共有できるようにする。	工業立地に関する地図や統計・画像などの諸資料から有用な情報を選択して、読み取り、図表にまとめることができたか。【知識・技能】
共有 5分	3 まとめた内容をグループ②で説明し合い、ビール工場が大都市圏に分布する理由を多面的・多角的に考察する。	・グループ①で調査したことを集約し、考察を深めさせる。	
	4 発問①に対する答えをグループ②で話し合い、文章でまとめる。まとめた内容を入力して、全体で共有する。	・考察する際は、複数の資料を根拠として「輸送費」に気付くことができるように声かけを行う。 ・いくつかのグループに発表させて、全体での共有を図る。	
発問②	発問②：他の飲料に関しても全て大都市に立地するのだろうか。		
5分	5 ビール以外の飲料においても大都市に立地するのかを考察する。	・原料指向型のミネラルウォーターや日本酒、ワインなどを例示する。	
まとめ 10分	6 発問②に対する答えについて「原料重量」「製品重量」「輸送費」というキーワードを用いて文章でまとめ、全体で共有する。	・ビール工場は原則、輸送費、消費が重要視されて、大消費地の近くに工場が立地する（市場指向型）。一方で、原料の特性によって原料指向型が存在することを理解させる。	工業の特徴や工業立地、それらの変化について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できたか。【思考・判断・表現】
活用 5分	7 本時の内容を踏まえ、日本の工業の立地分布図をみて、読解する。他の要因による立地パターンも学ぶ。	・本時に身に付けた地理的な見方・考え方を資料読解に活用させる。労働力指向型、集積指向型等を補足説明する。	

実施日時：令和6年11月6日（木）6校時（14:05～14:50）

場 所：31番教室

対 象：2年G組35名

授 業 者：佐賀 薫

教科書：New Rays English Communication Ⅱ（いっずな書店）

1 単元名

Chapter 7 The Psychology of Everyday Experience

2 単元の目標

- ① 日常のさまざまな例を通して、私たちの行動や心理に多くの理由が存在することを知る
- ② 社会心理学が日常の経験を説明し、社会的なやりとりに役立つことを理解する

3 単元と関連する CAN-DO 形式での学習到達目標

- ・読んだ内容について、論理的に意見を述べることができる。「2年 話すこと【発表】」
- ・表現を工夫して、相手に効果的に伝わるように話すことができる。
「2年 話すこと【やりとり】」

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・説明文を読んだり自分の考えを伝えたりするために必要な語彙や表現等を理解している。 ・読んだり聞いたりして理解したことについて、論理的に話して伝える技能を有している。	私たちの日常の行動の例を読み、社会心理学とはどのようなものか読み取る。「ドア・イン・ザ・フェイス・テクニック」、「社会的促進」、「認知的不協和」について理解する。	「ドア・イン・ザ・フェイス・テクニック」、「社会的促進」、「認知的不協和」から1つ選んで、自分の英語でspeaking 並びにwriting を行う。

5 単元観

本単元は、社会心理学を扱っており、形式としては説明文である。多くの生徒たちは日常生活において、級友や部員たちの行動に影響を及ぼしているものは何か解明したいと思うことがあると推察できる。社会心理学は私たちの行動の裏にある心理作用を科学的に説明する試みであることを理解させたい。生徒たち自身も思い当たるような具体的な行動例や事象を挙げているので、抽象的な定義を有する単語が多く登場するが、理解しやすい。

6 生徒観

理数科である。語彙力の増強やリスニング力の向上に地道の取り組むことに、やや消極的な姿勢を示す反面、文章読解に関しては、一読で内容を把握するほどの高い学力を有する生徒もいる。また、英語で自己表現する活動には関心が高い。将来英語を使用する環境を想定しているのが動機で、即興的に自己表現できることを目指している生徒も何人かいる。多くが音声面ではシャドウイングやオーバーラッピングに積極的に取り組むだけでなく、正確な発音を身に付けようとしている。まだ、自分の意見を述べる場合は文字に頼るが、素早く作成した英文は的を射ている。

7 単元の指導と評価の計画（総時数：7時間）

主な言語活動等（◎ 本時の内容）	評価
・社会心理学を知ること、自他の敬愛と協力を重んずる態度を養う。 ◎具体例の提示、具体例を読み解く心理学の応用という展開に習熟する。 ◎「クラスメイトと一緒に勉強することは、友情の絆を強めるだけでなく、あなたがより効率的な学習者になれることにも役立つかもしれません」という主張に関して自分の経験を添えて賛成か反対か英語で述べる。	・活動の観察 ・ワークシート ・定期考査

8 本時の学習（本時 4 / 7）

（1）目標

- ① 具体例の紹介と具体例を説明する「社会的促進」という概念の提示という説明文の展開に習熟する。
- ② 「クラスメイトと一緒に勉強することは、友情の絆を強めるだけでなく、あなたがより効率的な学習者になれることにも役立つかもしれません」という主張に関して自分の経験を添えて賛成か反対か英語で述べる。

（2）本時の展開（45分）

過程	学習活動	教師の支援及び留意点
復習 5分	○単語と表現の発音の確認 ○シャドウイングあるいはオーバーラッピング	○前時の内容を簡単に要約し、提示する。
展開 33分	○ 本時の学習課題を確認する。 (1)説明文の展開に習熟する。 (2)集団学習の効果の有無について意見を述べる ○ 内容の概略を把握する ○ワークシートに沿って、新出語句の定義を確認する ○ True & Question（ワーク・シート） ○ Question & Answer（ワーク・シート） ○ イディオムと文法事項の確認（ワーク・シート） ○ 日本語訳（ワーク・シート） (1) 比較の対象 ～ many bicycle racers set better records <u>when they competed against others than when they rode alone.</u> (2) 文構造の把握 The phenomenon in which the presence of companion in an activity or an audience enhances performance is called “social facilitation.” ○ペア・ワーク（会話） Which do you like better, studying alone or with your friend? Why? ○音読練習 1文ずつ ○シャドーイング（オーバー・ラッピング）	本時の目標・学習課題の板書 ○内容について簡単に英語で紹介する。 ○英語の定義を鮮明にイメージすることができるよう、配慮する。 ○根拠も求める。 ○電子黒板の使用。 ○電子黒板の使用。 ○複雑な文構造を正確に把握させる。 ○3分で、各ペアが話しあうよう指示する。4組の代表に発表する。 ○ 時間的余裕があれば recitation の指導もする
まとめ 7分	- 要約の作成（Summary） - 空欄に単語を1語補充し、Summaryを完成する。	○空欄が10以上になるように、Summaryを作成する。空欄に番号を記し、ペア1組がその番号の空欄に1語入れるよう指示する。

●科目名【 理科 】 記録者：鳥井拓弥（ 理科 ）

	よい点	課題	改善の手立て
授 業 深 い 学 び に つ な が る 思 考 力 発 問	・開かれた発問 ・フォームの回答を活用して追加で発問やヒントを出す ・実験ごとに考えさせることで深く考えさせていた ・解答を完全な形で提示しないことで思考を促す ・板書や掲示物により探究の過程が明確（仮説検証） ・本時の課題に対して様々な答えが出そう ・全体の流れが見える板書 ・あえてアバウトな問いにより生徒の考えを引き出す	・グループワーク中心だが、どのように個人の理解につなげるか ・班の中で異なる意見が出た時にどのように拾うか ・45分でどこまで進むか ・前時の授業とのつながり ・グループ発表がフォームに置き換わることの是非 ・実験間の違いを明確にする ・未定義用語の意味を推測することは難しい ・二酸化窒素と四酸化二窒素の実験を導入に使用するのはいかがでしょうか	・挙手や全員入力も1つの手段として検討してほしい ・どの実験を最初に見せて考えさせるかの吟味
（生徒の理解・活動的な授業） ICT機器の活用・教材の工夫	・本時の流れが明確である ・共テの出題と同じ実験 ・演示実験の十分な準備で短時間に結果が可視化 ・本時の流れを明示 ・フォームを活用し、多くの考えを即時反映 ・電子黒板の適切な利用 ・実験がわかりやすい ・予想が外れる実験により、興味関心が更に高まる ・班で1台タブレット使用	・グループ全員が授業についてきているか気になる ・食塩が沈殿する実験について、導入時点で生徒による予想は可能なのか？ ・帰納的または演繹的、どちらのアプローチなのかわかりづらいと感じた ・電子黒板の表示が、席の遠い生徒には見えにくい	・導入や実験の時間短縮を測る（例えば2つの実験をまとめる、2つの班に分担するなど） ・教科書の記述の確認を早めに行う ・3つの実験とルシャトリエの原理との関連性を考察させる ・集約した意見の見せ方を検討する（スプレッドシートの工夫） ・指導と評価の一体化
指導・助言	大曲農業高校 教頭 淀谷誠也先生より 研究課題である「生徒の深い学びを基盤とした授業実践」の観点から振り返ると、生徒にとって非常に思考を要する授業となった。今回の授業で扱った単元は、理論化学の核心にあたる単元の導入にあたる。対話的な学びという面では、生徒同士だけでなく、教師と生徒の対話が円滑に行われている。生徒が発表した考えを上手く引き出すような対話となっていた。また、学習指導案を見ると、学力の高い生徒でも結果の予想が困難な実験であったが、それでも予想できるように授業の流れが整えられていた。なお、生徒が自身の考えを表現するというのは難しく、化学的な表現でないものも多数見られたため、生徒たちをどのように成長させるかという視点をもって授業研究をしてほしい。最後に、研究協議の際に賛否のあった演示実験の内容において、生徒から驚きの声が上がったという点で、これこそ理科の授業の醍醐味であると感じている。		

●科目名【地理総合】 記録者：一関修二（地歴公民科）

	よい点	課題	改善の手立て
授 深 業 い で 学 の び つ な が る 思 考 力 発 問	・ 資料を活用して、活発な活動が展開されていた。 ・ 課題や資料の選定が適切であり発問も明確であった。 ・ 適切な実物資料を提示していたことにより、生徒の気づきを促していた。 ・ 個人の読み取りからグループへの共有により思考が深められていた。	・ 導入時の分布図に関して、3人で3社を確認して展開した方が効率よく展開できた。 ・ 時間不足により、読み取りの結果や考察内容など、発言の機会や意見を共有する場面が少なかった。 ・ 時間配分や活動内容の切り替えを明確にしたかった。	・ 時間配分を適切にすることで意見共有につなげる。協議する時間の明示や、共有発表時間を確保して逆算するなど。 ・ 活動の順序の変更や、グループの動かし方を単純にすることで時間配分的に意見共有につなげられた。
(生徒の理解・活動的な授業) I C T 機器の活用・教材の工夫	・ 実物資料が豊富に使用されていたため分かり易く、3種類の資料が他の班とは違っているため、ワクワク感や謎解き感があった。 ・ 電子黒板や実物投影など機器の使用が適切であった。 ・ 資料提示が工夫されていたため、読み取りや考察にうまく活用されていた。	・ 三人横並びの座席配置は、人数設定は良いが資料の見にくさと話しにくさがあった。 ・ モニターの接続、グループ再編成、個別対応などにより時間配分にロスがあった。 ・ グループ活動と先生の指示の切り替え。 ・ 事前の機器設定。 ・ グループ再編成の際の座席表の向き（生徒側からの視点で）。	・ 今回の授業では考察がメインとなる展開であった。そのため、課題や指示内容をもう少し焦点化し展開を考えるほうが、より良い展開になったと感じた。 ・ 作業手順や明示や段階的な課題を用意することで、授業の流れが円滑に進められたのではないかな。
指導・助言	・ 資料がよく練られており、適切な選定と配布時のワクワク感があり興味を惹き付けていた。 ・ 学習指導要領にある「地理的な見方・考え方」を働かせる学習過程には以下の5つがある。①位置や分布、②場所、③人間と自然の相互依存関係、④空間的相互依存、⑤地域。今回の授業展開では発問として①と⑤があり、②③④を作業として展開しており、指導要領に則した内容であった。また、協議会で配付した資料の図のように地理的事象を深い学びにつなげられる内容でもあった。 ・ 生徒にとってはビール自体が馴染みが薄いものであるため原料などをイメージしにくかったかもしれないが、大麦やホップなどの実物を手に取って見られたため思考につなげられたと感じた。また、考察の要因の一つになった水に関しては、「普遍原料」と「局地原料」の両面で考えられるため思考が広げられる。 ・ 工業立地に関しては、原料指向型・用水指向型・市場指向型などのモデルがあり、大都市周辺から近郊に移行している例も増えている。大手メーカーとマイクロブルワリーとの間でも傾向が変わるため、多角的な考察につなげられる。 ・ 地元の産業とのつながりも踏まえて取り組むことで地元を身近に感じさせる取り組み事例もある。		

●科目名【 英語科 】 記録者：三浦直彦（英語科）

	よい点	課題	改善の手立て
授 業 深 い 学 び に つ な が る 思 考 力 発 問	・ 本文の要約として穴埋め問題に取り組むことにより、本時の目標が達成できていた。 ・ 様々な活動をペアから全体で共有し、知的好奇心を刺激できた。 ・ 内容理解から発表までが1コマに詰め込まれ、理数科のレベルに合っていた	・ Q&Aの答えは生徒により形式、内容が色々だったが、その点をどのように確認・評価するのかが課題。 ・ 最後の発問への対応として、異なる形式で取り組ませてもよかったのではないかな。 ・ ペアワークの回数を増やしたい。	・ 口頭表現に加え、書かせたものを提出させて評価する。 ・ 最後の発問に対し、ディベート形式にして思考を促したり、要約を段落ごとに分け、グループで比較検討させることもできる。
（生徒の理解・活動的な授業） I C T機器の活用・教材の工夫	・ 電子黒板で例を紹介することで、効果的な ICT 機器の活用ができていた。	・ 電子黒板の文字がやや小さいように感じた。 ・ 電子黒板に加え、生徒が持っているクロームブックを効果的に活用したい。	・ 一太郎以外のソフトを活用し、Chromebook を使うと、文字の見やすさにつながる。 ・ Form への入力を行わせると視覚的に全体で共有できる。 ・ 電子黒板で示した内容を、後日 Classroom にアップして共有を図る。
指導・助言	よい点 1. 予め準備したものを発話するのではなく、言いたいことがあって、それをリアルタイムで英語で話している。教師も予測できない生徒の答えに即興でやりとりしている。 2. 秋田県は教師の英語使用が全国最低レベルという調査結果があるが、リスニング力を伸ばすという意図をもって1時間いっぱい英語で授業を行った。 3. 教師の「聴解力と会話力を鍛える」という信念のもと、教師・生徒間の信頼関係が感じられる授業である。 課題・改善点 1. 生徒の言語活動を増やし、生徒が終始英語を話すような授業を進めたい。 2. 教室を没入体験ができる場であるのとらえ、「教室だからこそできる」ことをどんどん導入していくとよい。		